

50.9.2 (水) 毎日

(1) 13版 ○ 第33297号 (明治25年3月25日第3種郵便物認可・昭和24年2月17日国鉄特)

会議を終え記者会見する (左から) ロートフラット、朝水、豊田、マルコフの各氏 (京都国際会議場で)



パグウォッシュ・シンポ閉幕

核超えて 全面軍縮を

【京都】「完全核軍縮への新しい構想」をテーマに京都・国立京都国際会館で五日間の討議を続けた第二十五回パグウォッシュ・シンポジウム(京都シンポジウム)は一日終わり、同日夕、朝水振一郎・東京教育大名誉教授、豊田利幸・名大教授、J・ロートフラット・ロンドン大教授らが記者会見し、人類の存在を脅かす

無限大への核兵器競争を呼び出した「核抑止論」の誤りを、改めて強調するとともに「核兵器だけでなく、全面的軍縮を最終目的に、軍力によって安全が保障されている現在の世界の構造を変えていかねばならない」と、核を超える時代への構想をうたった「まよめのレポート」を発表した。(4、18面に関連記事)

声明発表「抑止論は誤り」

まよめのレポートは核廃絶、世と平和への道を誤っており、来年昇平へのモラル、構想づくりを一月、インド・マドラスでシンポジウムを規模を拡大して開かれるの誤りの核保有国の非保有国に対する核兵器不使用宣言の全面核軍縮へのプログラムづくりの完全全面軍縮達成のための条件づくりとそのプログラムづくりの科学者の責任の五章にわたって核廃絶

アインシュタイン宣言(一九五五年)の最初の署名者の一人であるロートフラット教授や朝水博士をはじめ、十五カ国一国際機関が三十二人が参加、二十八日の開会式には病室療養中の湯川秀樹・京大名誉教授も車いすで出席、新時代への願いを切々と訴えた。日本で初のシンポジウムだった

が、世界平和への新しいカギを握る第三世界の参加者はわずかエジプト、インドの二カ国三人だけ。従来から指摘されていた、第三世界に鈍い「パグウォッシュ会議の限界は超えられなかった。」

【京都】パグウォッシュ・シンポジウムのおと朝水振一郎博士は、二十年前、ラッセルとアインシュ

タインが核時代における戦争の廃絶を呼びかけ、人類の生存が危険にさらされていることを警告した。この宣言の精神に基づいて私たちは全ての人に訴えたい。広島・長崎から三十年、いま私たちは重大な岐路に立っている。核兵器の開発と拡散がやむことなく行われていくか、あるいは核兵器が絶対に使用されない確実な保障に向かって大きな転換の第一歩を踏み出すか。

もし真の軍縮の達成を目指すならば私たちは核抑止の考え方を捨て、根本的に発想を転換することが必要だ。今日の時点で最も緊急な課題はあらゆる核兵器体系を確実に廃絶することにある。核兵器を戦争やうかつの手段にすることは人類に対する最大の犯罪だ。全世界の人々、特に科学者と技術者が時期を逸すことなく、私たちとともに進まねんことを訴える。さらに核軍縮の第一歩として各国政府が各兵器の使用と威嚇を永久かつ無条件に放棄することを要求する。